

特集

新生児肺疾患の画像診断上のPitfall

Pitfalls of Interpreting Neonatal Lung Imaging Studies

特集を企画するにあたって

藤本 隆夫
順天堂大学小児外科

Takao Fujimoto
Department of Pediatric Surgery, Juntendo University

本学会誌の新しい企画として、各編集委員の責任で特集を組むこととなり、その第1回特集として前号では甲田英一先生により『小児の被曝線量低減の試み』が組まれました。

今回は小児外科医である私の当番になりました。本来特集とは“最先端の知見”あるいは“基本的な知識の整理”のいずれかでなければならぬと思っています。今回私は後者を選択させて頂きました。その中でも日常診療にすぐに生かせる特集と考え、私たちが毎日診療の現場で撮影している胸部レントゲン写真、特に多彩な病変と経過を示す新生児の胸部レントゲン写真に着目致しました。

新生児にみられる呼吸器疾患の多くは呼吸窮迫を示す緊急性の高いものが多く、そのほとんどが臨床的な所見に加え、1枚の胸部単純レントゲン写真により診断が可能となります。1枚

の胸部単純レントゲン写真の誤診が患児の予後を左右するといっても過言ではありません。

そこで今回は『新生児肺疾患の画像診断上のPitfall』を企画し、新生児の様々な肺疾患の病態を胸部レントゲン画像から捕らえ、その読影上のポイントをご専門の先生方に解説していただくことと致しました。Air leakについては獨協医科大学教授 藤岡先生に、Chronic Lung Diseaseについては埼玉医科大学総合医療センター教授 小川先生、Meconium aspiration syndromeを鹿児島市立病院周産期センター部長 茨先生、外科の分野から肺の先天奇形を高槻病院小児外科 前田先生に執筆をお願い致しました。

臨床の現場ですぐに役に立つ企画だと自負しております。